



特別座談会

メディアは 「農業改革」を どう伝えたか

——個と集落、政策と消費者の狭間で——

農業改革が各地に混乱と狂騒を巻き起こしているが、その実態については、一般メディアであまり報じられない。そんな中、NHKは先頃この問題を特別番組で伝え、本誌が追及する岩手県北上市の「貸しはがし」も取り上げられた。消費者への情報伝達を担うマスコミが農業を扱う上での意図、方向性、壁とは何か。番組を進行した合瀬宏毅NHK解説委員に、大泉一貫氏と本誌編集長が聞いた。

構成／秋山 基

出席者

合瀬宏毅氏

日本放送協会 (NHK) 解説委員

大泉一貫氏

宮城大学事業構想学研究科研究科長

昆吉則

『農業経営者』編集長

農業経営者を集落に 閉じ込める農相発言

昆 農業改革を扱った「地域発! どうする日本」『誰が支える? あなたの食卓』点検・農業改革」(編集部註・2月2日19時30分~20時45分、NHK総合放送にて放送)を拝見して、失礼ながら、NHKとしてはよく踏み込んだなと感じました。どのような企画意図で制作され、放送に至ったのですか。

合瀬 NHKは今年、地域応援キャンペーンという取り組みを立ち上げまして、地方の抱える問題に向き合っているというつもりです。地方で最大の産業はやはり農業ですから、まずは真正面から農業を取り上げてみよう、これがスタートでした。

ただ、一般の視聴者は農村で進められている改革の中身をほとんど知らない。現在の農業の姿も知りません。そこで番組の前半では今、ムラで起きていることを伝える。後半では、生産者が消費者とのかかわりの中で経営者になっていき、消費者も農業とのかかわりを考える、という構成にしました。そして真ん中に松岡利勝農相の生中継を挟んだのです。

大泉 番組全体はよくできていると思います。だけど、インパクト



合瀬宏毅氏

日本放送協会（NHK）解説委員
1959年佐賀県生まれ。山口大学経済学部卒。
NHK入局後、鹿児島、名古屋などで勤務。
経済番組などのプロデューサーを経て2000
年より現職。

トが強かったのは、やはり北上市の貸しはがしについての農相発言でしたね。「伊藤（栄喜）さんが集落営農に参加すれば、解決する」という言葉が、今後の農政の流れを作ってしまうのではないかと心配です。

国の政策は、当初は認定農業者を主体に担い手を育成するはずだったのが、「認定農業者が不在の場所では集落営農」で内容が変わり、やがて認定農業者と集落営農が「対等」とされた。さらに、あの発言だと「集落営農が主で、認定農業者はそれの中に入ればよい」となってしまう。

昆 合瀬さんがスタジオで戸惑っていたのは、私にも伝わってきました。農相に対して「国が強引に政策を進めなくても、もっと時間をかければ（認定農業者に）自然に土地が集まったのでは？」という内容の質問もされていましたし。

合瀬 松岡農相には事前に「番組冒頭から見て下さい」とお願いしてい

たんです。ところが当日たまたま国会が延びて、中継場所に入ってもらった時には、もう番組が始まっていた。農相は化粧をしながら、北上の映像を御覧になったようで、それでああいった発言になったのではないかと思います。そういう意味では、農相には申し訳なく思っています。

大泉 松岡農相は集落営農の問題に戸惑っているのかもしれない。西日本ではあまり問題がない。現実には、農業経営者層は集落を越え、市町村をも越えて経営をしている。そんな彼らを「集落の中に閉じ込める」のは少々無理というので生じている問題だと思うのですが。

昆 集落営農が問題化しているのは、とりわけ東北・北陸です。水田農業が中心で、そこに天からお金が降ってくる仕組みがある。お金の「まき役」である農協が強くて、集落営農を最後の砦として守ろうとしている。農業経営者層でも、営業外収入がないと経営が成り立たないと決めたかかっている人は多い。

詰まる所、日本農業の可能性は、マーケットに任せることでしか見えてこないと私は考えるのですが、こういう議論は、NHK内部では優勢になりにくいのですか。

合瀬 NHKではここ5年間、農業の構造問題を大型番組で取り上げた

ことがありませんでした。テレビは視聴者にわかりにくいことはなかなか放送しづらい。「戦後農政の大改革」と聞けば、なんだかすごいフレーズだけど、その内容となると、局内でも理解されにくい。

あの番組は全局態勢で、会議を開くと30人ぐらいが集まりました。そこで「何が改革なのか」が議論されるわけです。私が「施策の対象となる農家を絞ることになった」と説明すると、一方では「対象から外れた人たちはかわいそうでは？」という反応も出てきます。

大泉 たしかに、今度の施策の一体どこが「大改革」なのか、玄人でもわかりにくい。まして一般の視聴者にはもっとわからない。

番組では、構造問題のエピソードとして中山間地（高知県大豊町）の話が入っていましたよね。あの流れもちょっと意味不明でした。中山間地の耕作放棄地を問題提起として取り上げるのは大事だと思う。だけど、中山間地でも、例えば同じ高知県の梶原町では、棚田を一般の人に開放するオーナー制度によって千枚田の保全を図っている。徳島県の上勝町では、おばあちゃんたちが葉っぱビジネスに参加しています。

つまり農業資源を活用できる知恵を出し、仕組みを作れたら、中山間

地にも活気が生まれるし、農村は豊かになる。むしろ農家が農地をエンクローズ（囲い込み）しているからこそ、農業に元気がないのではないかと、あたりまで問題を掘り下げれば良かったのですが、スタジオ解説は、「農家の暮らし」に結び付ける方向にいつてしまった。

はびこり続ける「農業Ⅱ弱者」との論理

昆 一緒にテレビを見ていた娘は「あんな狭い田んぼに大金を使うのは、おじいちゃん、おばあちゃん世代のために、若い世代がお金を出せっていうこと？　すごく無駄なんじゃないの？」と批評したんです。正しい見方だなと感心したのですが。

合瀬 そこに関しても、実は大変な議論がありました。私も中山間地と構造問題は別だと思っています。ですから、中山間地を扱うのであれば、もっと後の方でやらないと訳がわからなくなると主張した。けれども一方で「改革に取り残される所はどうするんだ」と考えるディレクターたちもいた。大豊町は「碁石茶」という発酵茶の産地で、すばらしい側面もあるのですが、コメ作りの上では、弱い人代表と扱われざるをえなかった。大泉 構造問題を扱おうとすると、どうしても番組の切り口が「衰退す



大泉一貫氏

宮城大学事業構想学研究科研究科長
1949年宮城県生まれ。東北大学助教を経て現職。農業振興計画やネットワーク作りにかかわる一貫塾も主宰。近著に『規制緩和 農業の縮小に歯止めを』（内外ニュース）。

る農業」と「農業をどう活性化するか」の2つに限られて、衰退局面を代表する現象として中山間地が出てくるでしょう。しかし、戦後、農業は衰退したけれども、農家は都市との比較で見ても相対的に豊かになっっているんです。ここの峻別がつかないと、「農家はかわいそう」とひと括りの議論になってしまう。

NHKも長い間、農業は弱いというイメージで報道してきたでしょう。そうではなくて、農家がいるから農業は弱いんだ、今までの農家に頼らないことが強い農業を作るんだという番組も作れると思うけど。

合瀬 そこは、放送する怖さも関係しています。テレビは影響力が大きいので、かなり勉強して番組を作らなくてはいいけない。ところが農業はちょっと勉強したぐらいでわかる世界ではありません。むしろ、ある程度まで勉強したら、「手に負えない」と投げ出しがちな分野なんです。

昆 農業問題が難しいのは、政策が逆転しているからでもあります。農業が産業であるならば、顧客にどうアクセスするか、どうやってお客さんに選ばれるかが語られるべきでしょう。農地や集落はその手段でしかない。ところが政策はまったく逆ですよね。「担い手」「認定農業者」という変な言葉もそう。本来お客さんにとっての担い手であるはずが、地域の担い手にされているし、お客さんが農業者を選ぶべきなのに、お上り農業者を認定している。

大泉 かつては「農業に経営なし」とまで言われましたよね。最近では農水省も経営者を育成すると言いながら、市場対応についてのノウハウはもっていない。問題は、この状況を座視している限り、農業経営者が、たとえ自分が損してでも、地代の面などで地権者にサービスせざるをえない状態が続くことです。これはもっと声高に語られてもいいと思う。

端的に言えば、農村における強者は多数派である地権者・兼業農家であって、農業経営者は少数派という意味では弱者です。農政は強者に与する政策を進めているともいえる。そこが世の中には間違っって伝えられていて、大規模な専業農家は強者で、兼業農家は弱者みたいに捉えられていますか。農業全体を弱者に

しておきたい人たちがいて、そのために大勢を占める兼業農家を弱者にしておきたいのでしょうか。

合瀬 たしかに逆、正反対なんですよね。小規模な兼業農家の中には必ずしも困っていない人たちもいる。兼業所得や年金があつて、農地の転用期待から土地を所有し続ける人たちがいる。むしろ専業農家の方が困っている。でも、そのことを内部で何度説明してもなかなかわかってもらえない。農業は弱くて、農村は大変で、マスコミは困っている人たちをなんとかしなくてはいけないという先入観があるんですね。

「集落」という名の幻想を捨てる

昆 集落の捉え方も見直す必要があります。混住社会となり、農業集落はすでに幻想と化しているし、多くの兼業農家は「補助金付き家庭菜園」をしているに過ぎません。

もともと農業集落は、住民全員がお百姓だった時代の概念です。農業以外に食べる術がなくて、共同作業をしたり、結いがあったりしたわけでしょう。時代はもう先にいったいののに、政策はまだ集落の論理で遂行されているし、農業団体も集落の論理を金科玉条のように主張し続ける。メディアも集落の構図でしかも

のを語らない。

合瀬 農業と農村をひとつのものと取り上げるのは、限界ですね。私たちも、農業をなるべく因数分解して、農家もひと括りにしないように切り分けて扱ったつもりです。

大泉 「どうする日本」は、その切り分けが、ある程度成功していたと思いますよ。

昆 悩ましいのは、伊藤さんのような事例を実名で報道すると、当人が集落の中で大変辛い状況に置かれてしまうことです。農業集落としては機能しなくなっているのに、そういう部分だけは残っている。

大泉 農村では近所づきあいと農業生産が絡んでいるから、厄介なんだけど、政策は近所づきあいに関与しない方がいい。そもそも集落を政策手段として使うことが間違っている。

都市部で役所が町内会に縛りをかけて、「予算を出すからこれをやれ」などと言ったら、ファシズムです。ところが農村は違う。集落でまとまって何かをやるのが美しいという意識になってしまっている。

合瀬 農水省の頭の中には、農地を守るしかない。私は、集落営農はそう悪いことばかりじゃないと思っっているんです。土地を集約して、競争力がつけばいいわけです。でもそうならないのは、中心となる「人」

がないからです。

土地を集めるのは経営の最初のステップで、本当は生産資源を使って何をするのかを考えなくてはいい。集落営農にはその発想がない。農水省も「1戸当たりの農業所得が8万円から43万円に増える」としか説明していません。しかし米価が暴落して経営がマイナスになった時、何が起きるのが説明されていない。

農業を伝える メディアの役割とは

合瀬 先ほど農業を伝える難しさについてふれましたが、番組を作りやすい状況も生まれてきています。日本が国際社会の中で存在感を示さなくてはいけなくなり、WTO（世界貿易機関）や経済連携協定（EPA）の交渉が課題となってきた。

今、私たちが豊かな生活を送れるのは貿易のおかげです。今後はもっと輸入も受け入れるべきだろうし、少子化で国力が落ちていきますから、中国なり東南アジアなりと、互いに市場を開放して仲間になっていく必要がある。日本の農業はこのままでもいいのかといった議論は、今なら視聴者にも非常にわかりやすい。農政改革を進めないと、一番困るのは消費者ですから。番組冒頭に食卓と食料自給率の話をもってきたの

も、強い農業を作らなければいけないというメッセージでした。

昆 EPAを進めなかったら、せっかく日本にある「良い市場」が弱体化して、国内農業にとつての「良いお客さん」が減るかもしれません。その意味では、貿易自由化の遅れは、農業経営者にとつてもマイナスです。ところが、日本のマーケット力に気づこうとしない、または意図的に気づかせないような愚民政策や評論がまだ続いている。

本当は「農業は」という括り方自体が間違っているのかもしれない。いまどき、メディアで「日本の工業は」「日本の商業は」とは言わないでしょう。農業が弱いとか、農業を強くといった言い方もおかしくて、個別の経営やグループ、ネットワークのビジネスとして単純に見た方がいい。強い農業ではなくて、選ばれる経営に視点を置く方がわかりやすくありませんか。

合瀬 私が「強い農業」と言ったのは、環境の変化に耐えうる農業という意味です。流通も変わってきましたよね。インターネットや直売所、個人宅配などの仕組みが整ってきた、徐々に農業者が単独で商売ができるようになってきた。地域産業としての農業と位置付ければ、色々な形があつていいし、農業者が互いに

競い合えばいい。

またおっしゃる通り、国内にはそれなりに高い農産物でも買ってくれるマーケットがある。ですからキーワードは「自立」と「自律」でしょう。いつまでも国や地域に頼った農業では、誇りがもてないし、産業としても立ち行かない。

大泉 EPAを地域経済全体の問題として捉えずに、農業だけの問題として考えるから、「農業がダメになる」という結論になるんですよ。

地域経済論の考え方からすれば、むしろ産業構造の変化に留意しなければいけないんです。すでに「融合の時代」に入り、農業は農業だけでは成立しなくなっている。農業は地域食品産業の中で成長していくのが、今後のあり方だと思います。

昆 世間には色々な農業メディアが存在しますけど、実態は「農業団体メディア」が「農業関係者メディア」です。彼らはさんざん「お為ごかし」を言い連ねてきましたが、今の状況では自己保身しかなかった。

他方、一般メディアの農水省記者クラブの記者たち、あるいは農政ジャーナリストの会の会員たちも、官や農業団体の広報マンなのかと、時々思うことがあります。

大泉 合瀬さんは農政ジャーナリストの会の会長でしょ（笑）。

昆 そうでしたか。

合瀬 雇われ会長ですけど（笑）。NHKについて言えば、現場は結構真面目ですよ。批判精神でしか番組は作らない。とはいえ、以前みたいに農水省と農協が丸となった頃には、メディアは二者をまとめて批判していれば良かったのですが、最近二者が分かれてきたでしょ。国を批判しようとすると、結果的に主張がどこか農協に近くなるという傾向はあるかもしれません。

けれども「NHKとしてはこういう考え方で」という決まり事はないんです。そこはジャーナリストの資質にかかわる問題で、自分が正しいと信じることをやるしかない。

大泉 マスコミが農業を取り上げる際には、国や農協が言うような「耕作放棄地は問題だ」といったステレオタイプに陥るのではなく、現場を虚心坦懐に見て、自分たちのセンスと実感から語ってほしいです。

昆 貸しはがし問題では、たまたまNHK、朝日新聞と私たちがタッグを組みました。大手メディアは影響力が大きいですが、普段、持ち場の違う人たちが、時には連動して農業問題を問う必要はありそうです。

合瀬 問題意識を共有することは大切ですね。

昆 今日はありがとうございました。